

平成28年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成28年度資源評価](#) > ダイジェスト版

標準和名 ウルメイワシ

学名 *Etrumeus teres*

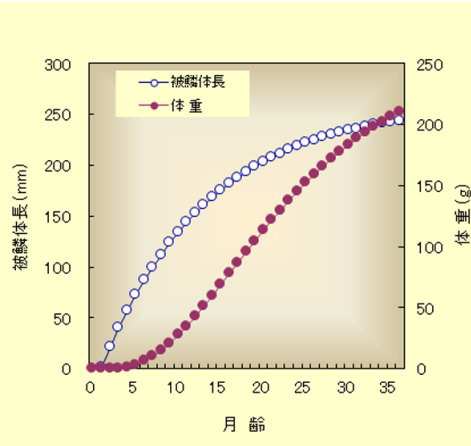
系群名 対馬暖流系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命： 3年程度
成熟開始年齢： 1歳(100%)
産卵期・産卵場： 九州周辺水域では周年、日本海北部では春～夏
食性： カイアシ類、十脚類、端脚類
捕食者： 大型魚類、ほ乳類、海鳥類、頭足類

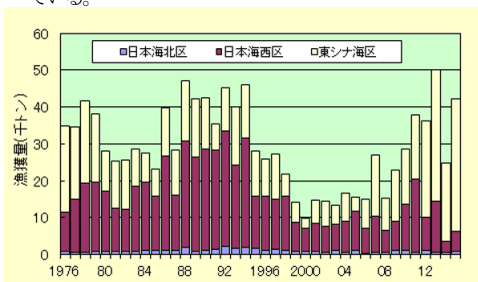


漁業の特徴

東シナ海区(福岡県～鹿児島県)では中小型まき網や棒受網により、日本海西区(福井県～山口県)では大中型まき網、中型まき網、定置網などにより漁獲され、日本海北区(石川県・富山県)では定置網などで混獲される程度である。本系群は我が国の他、韓国及び中国でも漁獲されるが近年の漁獲量は不明である。

漁獲の動向

漁獲量は1976～1998年までは毎年2万トンを超えていたが、2000年には1万トンまで減少した。その後は横ばいで2009年以降増加に転じ、2013年には1976年以降で最大となる5万トンとなったが、2014年は大きく減少して2.5万トンであった。2015年は再び増加して4.2万トンであった。海区別では東シナ海区と日本海西区が漁獲のほとんどを占めている。



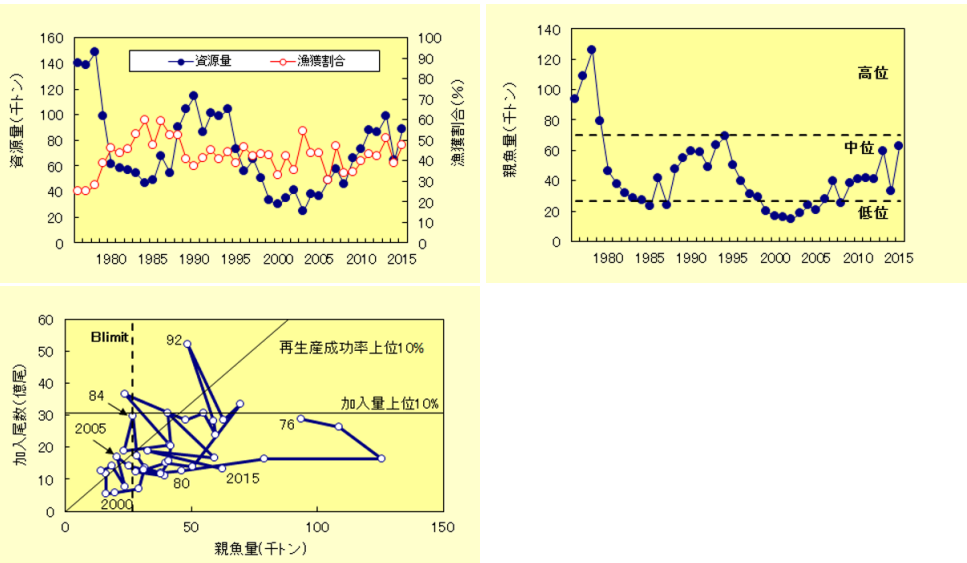
資源評価法

月別漁獲量と体長測定資料を用いたコホート解析により資源量を推定した。

資源状態

資源量と親魚量は増減を繰り返しながら推移し、2003年以降増加傾向にある。2015年の資源量は8.9万トン、親魚量は6.2万トンと推定され、いずれも前年より増加した。親魚量と加入尾数には正の相関が認められるが、親魚量が多くなると加入尾数は頭打ちになる傾向がある。資源回復を図る閾値となるBlimitは、加入尾数の上位10%を示す直線と再生産成功率の上位10%を示す直線の交点に近く、低い資源量でも高い加入がみられた1984年の親魚量(2.7万トン)とした。高位と中位の境界は親魚量の上位10%の値(7万トン)、中位と低位の境界はBlimitとした。2015年の親魚量はBlimit(2.7万トン)を上回ったが、親魚量の上位10%の値を下回ったため、資源水準は中位、近年5年間(2011～2015年)の資源量の推移から、動向は横ばいと判断した。





管理方策

2016年の漁獲係数を2015年と同等と仮定すると、親魚量は2016年に3.6万トン程度まで減少すると予測される。また、2015年の再生産成功率(21.2尾/kg)は、過去40年間で3番目に低い値であり、今後の加入量の減少が懸念される。そのため、親魚量を増加させることを管理目標とした。現状の漁獲圧を維持した場合、2017年以降に親魚量の増加が期待されることから、管理基準は現状の漁獲圧を維持するFcurrentとして2017年ABCを算出した。親魚量を一定以上に保つため、加入が少ないと判断された場合には0歳魚を獲り控えるなどの方策が効果的と考えられる。

管理基準	Target/Limit	F 値	漁獲割合 (%)	2017年ABC (千トン)	Blimit= 27千トン
					親魚量5年後 (千トン)
Fcurrent	Target	0.92	39	30	102
	Limit	1.15	44	34	62

- 本系群のABC算定には規則1-1-(1)を用いた
- Limitは各漁獲シナリオの下で許容される最大のF値による漁獲量。Targetは資源変動やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、各漁獲シナリオの下で、より安定的な資源の増大または維持が期待されるF値による漁獲量。Ftarget = α Flimitとし、係数αには標準値0.8を用いた
- 2015年の親魚量は6.2万トン
- Fcurrentは2006～2015年のFの平均値
- F値は各年齢の平均値
- 漁獲割合は2017年の漁獲量／資源量

資源評価のまとめ

- 資源水準は中位、動向は横ばい
- Blimitは、低い親魚量でも高い加入がみられた1984年の親魚量(2.7万トン)
- 2015年の資源量は8.9万トン、親魚量は6.2万トンで、Blimitを上回った

管理方策のまとめ

- 親魚量の増加を図ることを管理目標とし、2017年ABCを算出した
- 親魚量を一定以上に保つため、加入が少ないと判断された場合には0歳魚を獲り控えるなどの方策が効果的

執筆者: 安田十也・鈴木 圭・黒田啓行・高橋素光

資源評価は毎年更新されます。